

6 レタスの減肥栽培における品種特性

ねらいと成果

世界的な人口の増加やバイオ燃料としての穀物の利用促進により農作物の生産が増大し、それに伴い肥料需要が急増し、国際的に肥料価格が高騰しており、農家の経営を圧迫している。

その対策として減肥栽培技術が求められており、ここでは、本県の主要野菜であるレタスの2～3月どり栽培において、減肥栽培条件下での生育特性を調査し、結球重の減少や収穫株率の低下、収穫遅延などの影響について、品種特性を明らかにした。

内容

2005年9月28日に200穴セルに播種した苗を11月9日に定植した(供試品種については、図3の下を参照)。基肥は、標準施肥区として窒素成分32kg/10a(スーパIBS890:180kg/10a)、減肥区として窒素成分21kg/10aをマルチ内に施用した。トンネルは12月16日に被覆し、収穫は2006年2月28日～3月20日に行った。

結球重については、慣行品種のサントス2号、シスコは、標準施肥区に比べて減肥区で減少したが、レタスピッグペイン病耐病性品種では減少はみられず、エレガント、アントレー21、フェンサー1号、プラノ、ロジックは増加した(図1)。収穫株率は、減肥区で低下する傾向がみられたが、アントレー21、フェンサー1号は低下の程度が小さかった(図2)、収穫までの生育日数は、標準施肥区に比べて減肥区で5～12日長くなった(図3)。正常球率は、全区ほぼ90%以上と高かった(データ省略)。

以上の結果から、フェンサー1号、アントレー21は、減肥栽培による収量低下の影響が小さい品種として優れた特性を示した。

普及上の留意事項

品種の選択にあたっては、本結果だけでなく、べと病など栽培ほ場で発生している病害に対する耐病性などの要因についても考慮する必要がある。

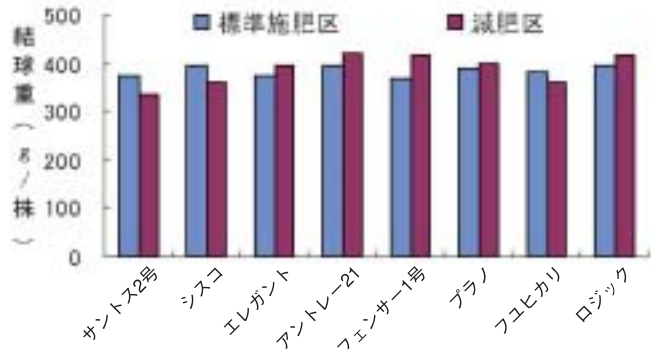


図1 施肥量の違いが結球重に及ぼす影響

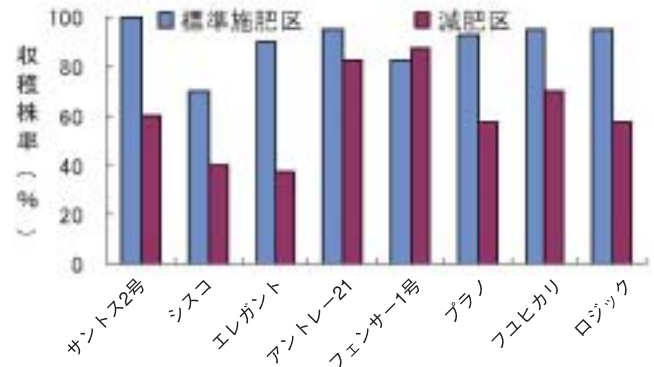


図2 施肥量の違いが収穫株率に及ぼす影響

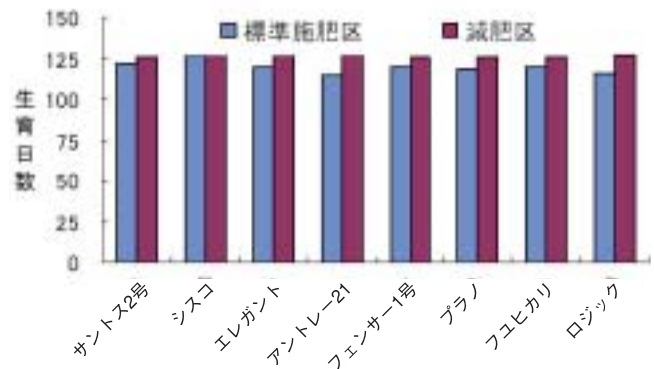


図3 施肥量の違いが生育日数に及ぼす影響

試験に用いた品種

慣行品種：サントス2号(フジイ)、シスコ(タキイ)
 レタスピッグペイン病耐病性品種：エレガント(タキイ)、
 アントレー21、ロジック(以上、横浜植木)
 フェンサー1号(ツルタ)、プラノ(住化)、フユヒカリ(野菜茶研)

小林 尚司(淡路農技セ 農業部)
 (問い合わせ先 電話：0799-42-4880)